

## プログラム・ノート PROGRAM NOTES

解説・柴田 克彦 Katsuhiko Shibata

**秋** シーズンの開幕は、今年生誕200年を迎えたブルックナーの交響曲第8番。高関健は東京シティ・フィルでブルックナーを随時取り上げ、進化の証を記してきた。中でもCD化されている2020年8月の第8番(第2稿)は印象的だった。当初の演目は歌劇「トスカ」だったが、コロナ禍で上演を断念。それでも可能な限りの大編成管弦楽を提供すべく、当時の首都圏では画期的な大曲の演奏がなされ、堅牢かつ雄大な名演が展開された。今回のポイントは「第1稿・新全集版ホークショー校訂」での演奏。信頼する指揮者から拒まれて一旦消えた第1稿は、当初の意思が反映された音楽である。今回は最新校訂版でそれを体験する貴重な機会となる。

アントン・ブルックナー(1824~1896)

## 交響曲第8番 ハ短調

### 〔第1稿・新全集版ホークショー校訂〕

ロマン派を代表するオーストリアの交響曲作家ブルックナーは、1868年以降ウィーンで活動。交響曲の創作&改訂を間断なく行い、第7番の初演が成功した1884年からの約10年間は栄光に包まれた。そうした好調期に書かれた本作は、彼が残した11の交響曲中、全4楽章の形で完成した最後の作品。演奏時間は11曲中最

も長く、対位法を駆使した大伽藍の如き立体感と英雄的な力感を有する音楽は、ブルックナーの総決算あるいは最高傑作と称されている。

### ●基本的な経緯

本作は、1884年7月に作曲が開始され、翌1885年8月にスケッチが終了。その間に第7番の初演が大成功を収めたことからブルックナーも自信を持って筆を進め、最終的には1887年8月10日に完成された。これが本日演奏される第1稿である。

そこでブルックナーは、ミュンヘンの指揮者ヘルマン・レヴィにスコアを送ったが、「演奏不能」という否定的な返事が返ってきた。レヴィは、第7番のミュンヘン初演を成功させ、ブルックナーが“芸術上の父”と呼ぶほど敬愛していた人物。そんな彼に拒絶されて落胆したブルックナーは、レヴィや弟子のヨーゼフ&フランツのシャルク兄弟の勧めに従って改訂に着手。1890年3月に新たな稿を完成させた。これが通常演奏されている第2稿である。

本作は、1892年12月18日ハンス・リヒター指揮ウィーン・フィルによって初演されて成功を収め、献呈したオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世から月桂樹の冠が贈られた。ただし、初演で使用されたのは、第2稿にヨーゼフ・シャルクらの手が入ったいわゆる「第2稿 シャルク版」(初演前の同年3月に出版)だった。

### ●稿と版の問題

かくして本作は、作曲者自身が手がけた2つの稿が存在する、第5番以降では唯一の交響曲となった。さらには、1892年最初に出版されたのが初演時の版=「第2稿 シャルク版」(初版や改訂版とも呼ばれるが、実際は改ざん版に近い。クナツパーツブッシュ指揮の名盤で有名)だった上に、その後校訂された本来(?)の第2稿においても、1939年刊行の「ハース版」と1955年刊行の「ノヴァーク版」で内容が違うことから、複雑な様相を呈するようになった。

現在シャルク版の演奏は稀だが、一般的に第2稿のハースとノヴァーク版も選択が二分されており、両者の折衷など独自の版で演奏する指揮者もいる。なお、高関健が2020年に使用したのは(基本的に)ハース版。同版には一部に第1稿の要素が取り入れられている。

第1稿は、1954年5月ミュンヘンにてヨッフムの指揮で第1楽章のみ初演され、1972年に同稿のノヴァーク版が刊行されたことから、1973年9月ロンドンにてシェーンツェラーの指揮で全曲が初演された。そして1982年にインバルが録音し、以後複数のディスクが出されている。

本日演奏されるのは、2022年に出版されたポール・ホークショー校訂による最新版。ホークショーは、ブルックナー研究の第一人者で、イェール大学の名誉教授でもある。ちなみに、同版もボシュナー指揮のCDが出ている。

### ●第1稿の特徴

「第8番の改訂は、演奏されるためになされた妥協の産物で、当時自らの創作に自信を持っていた(第5~7番は改訂を行っていないし、第4楽章を「私の生涯で最も優れた音楽」と自認し

ていた)ブルックナーの本意ではない。すなわち第1稿こそ作曲者本来の意思やヴィジョンを反映したものである」といった見方も根強い。

第2稿との顕著な違いを楽器法の面でみれば、第2稿が3管編成・ホルン8本(途中で4人がワーグナーチューバに持ち替え)であるのに対して、第1稿は第1~3楽章が2管編成・ホルン4本・ワーグナーチューバ4本(第4楽章ではホルンと持ち替え)で、第4楽章のみ3管編成である点大きい。また第1稿には、第2稿にないピッコロ(第3、4楽章)とコントラファゴット(第4楽章)が持ち替えで含まれている。ブルックナーの交響曲で初めて採用されたハーブは両稿に共通しているが、第2稿では第2、3楽章に、第1稿では第3楽章のみに登場する。他では、第3楽章の頂点で鳴らされるシンバルの数(第2稿は2発、第1稿は6発)なども違っている。

音楽面では、短縮が多くなされた第2稿に比べて全体に長い点がまずは大きく違う。構成も随所で異なるが、第1楽章の最後が息絶えるように終わる第2稿に対して、第1稿ではその後に主要主題が登場し、fffで力強く終わる点と、第2楽章のトリオー特に前半一がほとんど別の音楽になっている点が、明確な違い。第4楽章の最後に第2稿のようなユニゾンのフレーズがなくハーモニーで終わる点も第1稿の特徴だ。

なお、第1稿のホークショー版とノヴァーク版は、構成自体に大きな違いはないものの、スラーやアクセントの位置など、アーティキュレーションがかなり異なっているとの由。

**第1楽章**……アレグロ・モデラート。霧のようなブルックナー開始に続くシリアスな第1主題、2連符+3連符のブルックナー・リズムによる歌謡

的な第2主題、弦楽器のピッツィカート上で奏される流麗な第3主題と、それらの拡大、反行形を中心に荘嚴な音楽が展開される。なおブルックナーは、終盤のトランペットとホルンのファンファーレを「死の予告」だと述べている。

**第2楽章**……スケルツォ、アレグロ・モデラート。ブルックナーがのちに「ドイツの野人」と呼んだ男性的で力強いスケルツォ。角ばった動きの主題を軸にした主部に、穏やかなトリオが挟まれる。

**第3楽章**……アダージョ、厳かにゆっくりと、しかし引きずらないように。深く美しい緩徐楽章。ブルックナーの交響曲の中で最長の楽章でもある。ここは変ニ長調。瞑想的な2つの主題を中心に進行し、やがて壮大なクライマックスが訪れる。

**第4楽章**……フィナーレ、厳かに、速くなく。長大かつ充実した終曲。ブルックナーがコサツクの進軍に例えた行進曲調の第1主題、コーラル風の第2主題、逍遙する第3主題を軸に多様な展開を遂げ、最後は全楽章の主要主題が一同に会して圧倒的な頂点が築かれる。

#### ■楽器編成

フルート3(ピッコロ持ち替え)、  
オーボエ3、クラリネット3、  
ファゴット3(コントラファゴット持ち替え)、  
ホルン8(ワーグナーチューバ4持ち替え)、  
トランペット3、トロンボーン3、チューバ、  
ティンパニ、シンバル、トライアングル、  
ハープ3、弦5部

#### 柴田 克彦(しばた かつひこ)

音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、WEB、宣伝媒体、CDブックレットへの寄稿、プログラム等の編集業務、講演や講座など、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)、「1曲1分でわかる!吹奏楽編曲されているクラシック名曲集」(音楽之友社)。

## 第1稿・新全集版ホークショー校訂について

ブルックナーの作品研究は現在ハース、ノヴァークに続く第3世代が活躍、その成果に基づく新全集版も第1交響曲「リンツ稿」、第4交響曲「第2稿」が出版され、いずれもシティ・フィル定期で紹介させていただいた。

新全集版では一人の研究者が、交響曲1曲のすべての稿を一貫して校訂するシステムを取る。第8交響曲を担当するポール・ホークショーは、現存するスケッチから出版譜まで、すべての資料を整理分類したカタログのような校訂報告を2014年に先ず出版。これにより作曲と改訂の道筋が明確に既定された。そしてこのたび新しく校訂された「第1稿」(2022年)を発表、この最新版を今晚皆さんにお聴きいただく。

「第1稿」は作品が完成したそのままの状態であり、既出のノヴァーク校訂版(1972)とホークショー版との間に基本的な差異はない。ホークショーによれば、ノヴァークは校訂にあたり、オーストリア国立図書館が所蔵する全楽章の筆写譜を底本としたが、ホークショーは楽章ごとの自筆原稿を底本に筆写譜など複数の資料と比較精査、ノヴァーク版に残る約400個所の錯誤を訂正したとのことである。

一度完成した作品の出来に自信が持てず、慎重に綿密に改訂を繰り返したブルックナー。しかし1884年末に第7交響曲がライブツィヒで初演、初めて国際的な成功を収めて以降その状況は変わる。ヨーゼフとフランツ・シャルク兄弟をはじめ、弟子たちは師匠の作品がもっと頻繁に演奏されるよう尽力する一方、簡単には理解が得られなかった作品を、平易に聴きやすく変更することを師匠に提案。ブルックナーも勤

めに応じるようになり、改訂への姿勢は次第に変化していく。そして弟子たちの干渉の度合いも、時間の経過とともに徐々に強まっていく。

第8交響曲では事情はさらに複雑で、作曲が開始された当初から弟子たちがさまざまな形で関与していたことが研究で明らかになっている。例えば1886年夏、シャルク兄弟はブルックナーが作曲中にもかかわらず、完成していた第1、第2楽章の筆写譜を借り出し、ピアノ連弾用の編曲のみならず管弦楽化の変更案まで作り始めている。変更案は「第2稿」と同じ木管3管編成で書かれ、第1楽章の終結部を静かに終わらせる案もこの段階で模索している。

翌1887年8月に完成した「第1稿」が、初演を約束していたヘルマン・レヴィに「このままでは演奏不可能」と厳しく評価され、落胆したブルックナーはすぐに改訂を思いつく。改訂の本来の目的は曲想の充実とともに、木管2管編成で書かれた第3楽章までを第4楽章と同様の3管編成に増強することであった。

当時いわゆる「改訂の時期」の渦中にあり、弟子たちの干渉により多くの仕事を抱えたブルックナーは、第9交響曲の作曲を中断して作業にあっていた。第8交響曲の改訂は1889年9月によく着手、6か月後の翌年3月にほぼ出来上がる。一貫して作曲者の創意に基づく素晴らしい改訂と評価できるが、第1楽章の輝かしい終結部の削除や第3、第4楽章の短縮などは、先行の第3、第4交響曲「第3稿」への改訂と同様に弟子たちが干渉した可能性が高く、どこまでがブルックナーの真意なのか判断しづらい。ホークショーによれば、改訂はできるだけ早く第9交響曲の作曲に取りかかるため急いで行われたようで、最初から木管3管編成で書かれた第4楽章では、「第1稿」の自筆原稿

に直接改訂が書き込まれ、そのため筆跡も乱れ、強弱や表現を含め細部まで完成していないと思われる部分も多く見受けられる。

第8交響曲は私自身にとって常に憧れであり、カラヤンを筆頭に巨匠たちの素晴らしい実演を経験し、スコアの研究も続けてきた。指揮する機会に恵まれて以来、一貫して「ハース版」を演奏してきたのは、巨匠たちに倣う気持ちもあったが、「第2稿(ノヴァーク版)」に残る無理な裁断-接続および不合理な個所が、改訂の核心からあまりにもかけ離れており、到底納得できなかったからである。その点、改訂された「第2稿」を基に、弟子たちの干渉によって裁断されたと思われる部分だけを「第1稿」などから再生した「ハース版」は、原典批判の立場からは逸脱しているが、作品の継続性を確保しつつ十分に音楽的で、私にとって必然の選択であった。なお、近く出版が予告されているホークショー校訂による「第2稿」では、最新の研究成果を基に「ノヴァーク版」とは異なる形態が示される可能性があり、期待しているところである。

話を戻して、「第1稿」と「第2稿」を比べると、音の選択や和声進行、表情や強弱など細部にわたる違いがある。しかし改訂される以前の楽想にかえて魅力を感じることもあり、実に興味深い。テンポの設定を変えて演奏する必要もあるだろう。「第1稿」を改めてよく知ることで、第8交響曲をより深く理解、表現の充実に利することも多いと考える。これこそが今晚初めて「第1稿」を演奏する最大の目的である。

常任指揮者

高岡 健